

67 宿場町 (2021年6月22日)

チェルヌスキ美術館で開催されている「木曾街道の旅-広重から国芳-」展 (<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100158241.pdf>) では、木曾街道にあった69の宿場町の様子を描いた浮世絵が展示されています。木曾街道は中山道とも言われ、江戸時代に作られた五つの主要街道（五街道）の一つです。五街道とは、東海道、中山道（木曾街道）、甲州街道、日光街道、奥州街道のことで、江戸時代（1603-1868）に整備されました。



※五街道のルートはイメージ図で、厳密ではありません。

江戸幕府が街道を整備した目的には、大名たちが江戸と自分の領土を一年おきに往復する参勤交代を義務付けたことがあります。大名たちは、江戸には正妻と世継ぎを残し、家来を引き連れて江戸と自分の領土の間を往復しました。歌川広重による「木曾海道六十九次」には、大名行列を描いたものがあります（写真）。通りの脇で、行列が通り過ぎるのを待つ人がいるのがお分かりになるでしょうか。



« Kano » de la série des « Soixante-neuf Relais de la route du Kiso kaido » par UTAGAWA Hiroshige
歌川広重「木曾海道六拾九次之内 加納」

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

そもそも「木曾海道六十九次」とは、中山道(木曾街道)沿いに設けられた69の宿場の様子を描いた浮世絵シリーズです。宿場と宿場の間は、平均すると約5キロから15キロくらいありました。宿場には、大名一行や旅人が宿泊する宿(本陣や旅籠)、休憩するための茶屋、人や馬を交代させる業務を行う問屋場などが設けられ、多くの人で賑わいました。「木曾海道六十九次」には、宿で食事や入浴する人を描いた絵(写真)もあります。



« Shimosuwa » de la série des « Soixante-neuf Relais de la route du Kisokaido » par UTAGAWA Hiroshige
歌川広重「木曾海道六拾九次之内 下諏訪」

明治時代(1868-1912)に入り、鉄道が整備されていくにつれて歩いて旅をする人が減り、宿場は廃れていきました。五街道に並行して整備された幹線道路や鉄道は、今日でも日本の物流に重要な役割を果たしています。木曾街道と同じく江戸と京都を結んでいる東海道は、東名高速道路や東海道新幹線が走り、日本の大動脈と言われています。中山道も新たな道路が整備されましたが、長野県の山間地域は開発されなかったおかげで、かつての宿場町であった妻籠や奈良井には、現在でも昔ながらの風景が残されています。



Tsumago-juku / 現在の妻籠宿

「木曾海道六十九次」には、江戸時代の日本の風景と当時の人々の生活が描かれています。美術館でぜひ本物をご覧になって、宿場町で働く人や茶屋でくつろぐ人を探してみてください。

※「木曾街道の旅-広重から国芳-」展 於：チェルヌスキ美術館 2021年8月8日まで

<https://www.cernuschi.paris.fr/fr/expositions/voyage-sur-la-route-du-kisokaido-de-hiroshige-kuniyoshi> (仏語のみ)